# 初期文法学派のダルマ論序—日常世界と祭式世界における知行*

川村　悠人

## 1　問題の所在

パーニニ文法学派のダルマ論（*dhamra*「正しい行い、そこから得られる潜勢力、効力、功徳」）を包括的に扱う研究として Aklujkar 2004 がある。しかし、同論文の主軸はあくまで言語哲学者バルトリハリ（5 世紀頃）の理論に置かれており、その論考からは、最初期の文法学者カーティアーヤナ（紀元前 3 世紀頃、東インド）とパタンジャリ（紀元前 2 世紀中頃、おそらく北インドのマトゥラー近辺）自身のダルマ論の具体的な姿は見えてこない。赤松 1994 もまた、バルトリハリ思想を論功の枢軸に据えたものである。バルトリハリの時代になると、おそらく聖典解釈学派の影響から、文法家のダルマ論は「ダルマ開顕説」（*dharma-abhivyakti-vāda*）（片岡 1999; 片岡 2011: §2.3 [177–199], Kataoka 2000）の様相を帯びるようになる。常住であるダルマが具体的な祭式行為に促されて発現し果報をもたらすとする考えである。

カーティアーヤナとパタンジャリのダルマ論については、その要点を示す平明な解説が Cardona 1997: pars. 830–833 に見られるが、網羅的ではなく、本格的考察を含まない。加えて、管見によれば、両文法学者のダルマ論をヴェーダ思想の延長線上にあるものと捉え、そのような観点から、前者に見られる後者の影響、需要、援用を分析した研究は極めて少ない（例えば Thieme 1931）。両者の繋がりに具体的に論及する尾園 2014 の言は貴重である。

> 尾園 2014: 59.13–17: 「上記出典不明の詩節では, 正しい言葉の使用を知る人は, あの世で勝利を得ると言われている。正しい言葉の使用の効力が現世ではなく, 来世に得られると説いていることが注目される。行為の効力が来世において決定するという考えは「業」（*kármaṇ-*）の理論に通じる。業の理論の起源は *iṣṭā-pūrtá-*「祭式と布施の効力」の理論に遡る」[1]

後代の複雑化した理論を持ち込むより、ヴェーダ思想の敷衍形と考えた方が理解しやすい議論が Mahābhāṣya には多く看取される。本稿は、このような視点をもって、「正しい行い、功徳」（*dharma*）とそこから得られる「繁栄」（*abhyudaya*）に言及するカーティアーヤナとパタンジャリの重要な諸言明を洗い直し、今後の発展的研究のための土台作りを目指すものである。

## 2　功徳積重と繁栄獲得の手段としての文法学

カーティアーヤナの Vārttika は次の言明をもって開始される。

> vt. 1 (Paspaśā): *siddhe śabdārthasambandhe lokato ’rthaprayukte śabdaprayoge śāstreṇa dharma-niyamo yathā laukikavaidikeṣu* ||

*本稿は、京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム—南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第二回定例研究会（2016 年 6 月 24 日）並びに本共同研究の公開シンポジウム「古代インド思想における「知」の深化「知」の拡大」（2016 年 10 月 8 日）にて発表した原稿の改定版である。発表の際、示唆に富む有益な助言をくださった研究会参加者の方々に万謝の意を表したい。また本稿を著すにあたり、吉水清孝先生から apūrva 論に関する諸論考を提供していただいた（吉水 1998; 2012, Yoshimizu 2000）。ここに記して謝意を表する次第である。本稿は JSPS 科研費 15J06976 の助成を受けたものである。

[1]祭式と布施の効力が来世において発現するという祭式理論は、善い行為と悪い行為の効力が来世を決定するという業の理論へと発展する。ヴェーダ学の知見から業と輪廻の思想に考察を加えた近年の研究として後藤 2009、「祭式と布施の効力」を論ずる最新の研究成果として阪本 (後藤) 2015 がある（特に§8 [71–91]）。

世間［の言語慣習］に従って、言葉と意味の関係が確定しており、意味に促されて言語使用がなされるのならば、文法学によって、功徳のために［言語使用の］制限がなされる。日常の世界体系とヴェーダの世界体系の中で［功徳のために制限がなされる］ように。

バルトリハリによる前半部分の趣意説明は明快で参照に値する。

MBhD on MBh (Paspaśā) [24.21–23]: *arthena prerite arthaprayukte | yasmāl lokād ayaṃ śikṣate sa lokaḥ sāparādhaḥ | sādhūn asādhūṁś ca śikṣayati | yaś cātmapratyāyane 'rthaḥ prerayitā so yathaiva gaur ity etaṃ prerayaty evaṃ gāvyādīn api | ataḥ śāstrapravṛttiḥ evamarthā katham asādhavo nivarterann iti |*

*arthaprayukte* とは、意味に促されて［*arthena prerite*］という意味である。この者が［言葉の］学習の拠り所とする世間［の言語慣習］は、間違いを含んでいる。［世間の言語慣習は人に］正しい諸語と正しくない諸語［のどちら］を［も］学習させる。そして、自己を理解させるために［言語使用を］促すものである意味、それは *go*（「牛」）というこの［正しい語の使用］を促すのと全く同様に、*gāvī* (Jaina Mahārāṣṭrī) 等［の正しくない語の使用］も促す。これ故、文法学が発動する。「どうすれば正しくない諸語［の使用］は制止され得るか」というこのような目的をもって。

### 2.1 日常世界における制限

カーティアーヤナは、日常世界とヴェーダ世界において功徳のために制限がなされると述べた。以下、パタンジャリが提示するそれぞれの例（MBh on vt. 1 [Paspaśā] [I.8.10–20]）を一つずつ見ておく。まず日常世界における例である。

MBh on vt. 1 (Paspaśā) [I.8.10–12]: *loke tāvad abhakṣyo grāmyakukkuṭo 'bhakṣyo grāmyaśūkara ity ucyate | bhakṣyaṃ ca nāma kṣutpratīghātārtham upādīyate | śakyaṃ cānena śvamāṁsādibhir api kṣut pratihantum | tatra niyamaḥ kriyata idaṃ bhakṣyam idam abhakṣyam iti |*

まず、日常世界における［制限の例］。「村落に属する雄鳥を食べてはならない。村落に属する豚を食べてはならない」と言われる[2]。そして、食べ物というものは空腹を解消するためにとられる。それで、この者は犬の肉等によっても空腹を解消することができる。そのことについて制限がもうけられている。「食べてよいのはこれであり、食べてはならないのはこれである」と。

### 2.2 祭式世界における制限

次に、祭式世界における例を挙げる。

MBh on vt. 1 (Paspaśā) [I.8.16–18]: *tathā bailvaḥ khādiro vā yūpaḥ syād ity ucyate | yūpaś ca nāma paśvanubandhārtham upādīyate | śakyaṃ cānena kiñcid eva kāṣṭham ucchrityānucchritya vā paśum*[3] *anubanddhum | tatra niyamaḥ kriyate |*

さらに［祭式世界の例］。「祭柱はビルヴァ樹製またはカディラ樹製のものであるべきである」と言われる。そして、祭柱というものは、犠牲獣を縛り付けるために用意される。それで、彼

[2]BaudhDhS 1.5.12.1: *abhakṣyāḥ paśavo grāmyāḥ* ||（「村落に属する家畜たちを食べてはならない」）BaudhDhS 1.5.12.3: *tathā kukkuṭasūkaram* ||（「同様に、雄鳥と豚を［食べてはならない］」）

[3]テクストの *paśur* という読みを修正する。

は全くどんな木片であれ、それを直立させ、あるいは直立させずに、［それに］犠牲獣を縛りつけることができる。そのことについて制限がもうけられている[4]。

### 2.3 言語使用の実地における制限

カーティアーヤナは第 1vārttika において、上記のような、日常生活とヴェーダ祭式の中に観察される制限の概念を言語使用の場に拡張している。パタンジャリの説明を見よう。

> MBh on vt. 1 (Paspaśā) [I.8.20–22]: *evaṃ kriyamāṇam abhyudayakāri bhavatīti* || *evam ihāpi samānāyām arthagatau śabdena cāpaśabdena ca dharmaniyamaḥ kriyate śabdenaivārtho 'bhidheyo nāpaśabdenety evaṃ kriyamāṇam abhyudayakāri bhavatīti* |
>
> . . . 以上のように［制限のもと］なされるものは、繁栄をもたらすものとなる。次の事例も、［上述の、日常世界と祭式世界の諸事例と］同様である。［すなわち、］正しい言葉（*go* 等）によっても正しくない言葉（*gāvī* 等）によっても同じ意味理解が起こるならば、功徳のために［言語使用の］制限がなされる。「正しい言葉によってのみ意味は表示されるべきであり、正しくない言葉によって表示されるべきではない」と。このように［制限のもと］なされるものは繁栄をもたらすものとなる。

本論 4.3 で示す祭式世界との対比から考えて、上掲のカーティアーヤナとパタンジャリの言は、ヴェーダ祭式の場でなく実生活の場面での正しい行い（文法学者にとっては「正しい言葉を使用すること」）を論ずるものと見てよい[5]。

注目に値するのは、上の引用中でパタンジャリが—「祭式と布施の効力」論に見られるような効力の保管と享受に関する機構は明示されないものの—正しい行いの結果として功徳・効力は蓄積されて繁栄の原因となる、という仕組みを示唆していることである。

## 3 祭式行為と日常行為

以上から、パタンジャリが、正しくない言葉（*apaśabda*）から区別されるものとしての正しい言葉（*śabda*）を派生組織を通じて説明、知らしめる文法学（*śabdānuśāsana*、*vyākaraṇa*）を、日常の言語使用の実地における功徳積重と繁栄獲得の手段と見なしていることが分かる（カーティアーヤナについては§4.3）。一方でパタンジャリは、当然ながら、文法学がヴェーダ補助学（*vedāṅga*）の一つであることを念頭に置き[6]、ヴェーダ文化の伝承と維持の視点からも文法学学習の必要性

---

[4]AB 2.1 (28.17–22): *khādiraṃ yūpaṃ kurvīta svargakāmaḥ* | *khādireṇa vai yūpena devāḥ svargaṃ lokam ajayan* | *tathaivaitad yajamānaḥ khādireṇa yūpena svargaṃ lokaṃ jayati* | *bailvaṃ yūpaṃ kurvītānnādyakāmaḥ puṣṭikāmaḥ* | *samāṃ-samāṃ vai bilvo gṛbhītas tad annādyasya rūpam ā mūlāc chākhābhir anucitas tat puṣṭeḥ* |（「カディラ樹製の祭柱を作るべきである、天上界を望む者は。カディラ樹製の祭柱によって神々は天上界を勝ちとったのだ。全く同様に、ここで、祭主はカディラ樹製の祭柱によって天上界を勝ちとる。ビルヴァ樹製の祭柱を作るべきである、食べられる食物を望む者、繁栄を望む者は。年ごとに、ビルヴァ樹には果実が実るのだ。それは食べられる食物の印である。［ビルヴァ樹は］根に至るまで枝々に覆われる。それは繁栄の［印］である」）

[5]ヤルヴァーナ（yarvāṇa）やタルヴァーナ（tarvāṇa）と呼ばれる聖仙団の伝説を他の箇所でパタンジャリは語る。当該の伝説は、誤った言語使用により罪悪を負うことになるのは祭式の場においてであり（*yājñe karmaṇi*）日常世界においてはその限りではないこと、言語使用の制限は日常世界に必ずしも持ち込まれる必要がないことを示唆している。しかしこのことは、「日常世界における正しい言語使用は功徳をもらたす」という考えを否定するものではない点に注意すべきである。ヤルヴァーナとタルヴァーナの物語については Cardona 1990: 7.9–19 および Cardona 1997: paragraph 833 を見よ。

[6]文法学は、ヴェーダ文献で使用される語の構成と意味を理解するための手段としてヴェーダ文化の護持に資するという点で、ヴェーダ補助学の地位を得る。Uddyota on Pradīpa to MBh ad A 1.1.1 (I.122.24–25):

を論じている。彼によれば、祭式時に誤った言葉を使用することがないよう、婆羅門たちは文法学を学んでおかねばならない（MBh [Paspaśā] [I.2.13]: *duṣṭān śabdān mā prayukṣmahīty adhyeyaṃ vyākaraṇam*）。その傍証として彼は次のような詩節を引用している（MBh [Paspaśā] [I.2.11–12]）。

*duṣṭaḥ śabdaḥ svarato varṇato vā*

*mithyā prayukto na tam artham āha* |

*sa vāgvajro yajamānaṃ hinasti*

*yathendraśtruḥ svarato 'parādhāt* ||

言葉はアクセントまたは音素の点で欠陥を抱えたものとして

誤って使用されると、その［意図された］意味を伝えない。

そのような［言葉］は言葉の棍棒／雷（*vāgvajra*）となって祭主を傷つける。

*indraśatru* という語がアクセントの点で誤っていたため［祭主を傷つけたように］[7]。

## 4 知行による功徳の積重

パタンジャリは、正しい言葉の知識と正しい言葉の使用という行為、どちらが功徳の原因となるのか—§2.3 に引用したパタンジャリの説明は少なくとも後者は必要であることを表明しているように見える—を問う。

MBh (Paspaśā) [I.10.4]: *kiṃ punaḥ śabdasya jñāne dharma āhosvit prayoge* | *kaś cātra viśeṣāḥ* |

【問】しかし、正しい言葉を知っていれば功徳があるのか、それとも使用すればあるのか。また、これらにはどんな違いがあるのか。

続く vārttika 6–9 においてこの問いが吟味される。

### 4.1 知識のみに基づく功徳

まずはじめに、正しい言葉を知ってさえいれば功徳は積まれるとする見解が提出され、否定される。

vt. 6 (Paspaśā): *jñāne dharma iti cet tathādharmaḥ* ||

［正しい言葉を］知っていれば功徳があると言うならば、同様に罪悪もあることになる。

---

*aṅgatvāt—padapadārthabodhanadvārā vedopakārakatvāt* | *mukhaṃ vyākaraṇam ityādināṅgatvanirūpaṇāc ca* | *pradhānaṃ ca ṣaṭsv aṅgeṣu vyākaraṇam iti paśpasāyāṃ bhāṣyokteś ca* |（「『補助学であるから』について。語と語意を理解させることを通じてヴェーダを扶助するものであるから［、文法学はヴェーダ補助学である］。また、『文法学は口である』等によって、［文法学がヴェーダ］補助学であることが確定されているから。さらに、『そして、六補助学のうち主要なのは文法学である』と Paspaśā において Bhāṣya が述べているから」）

[7] PŚ 52: *mantro hīnaḥ svarato varṇato vā mithyā prayukto na tam artham āha* | *sa vāgvajro yajamānaṃ hinasti yathendraśatruḥ svarato 'parādhāt* || 尾園 2014: 68.6–12:「トゥヴァシュトゥリは息子ヴィシュヴァルーパがインドラに殺されたことを怒り, ソーマの喫飲から除外した。除外されたインドラは招かれずに勝手にソーマを飲み干した。それを怒ったトゥヴァシュトゥリはインドラを殺そうとしてインドラの敵（*indra-śatrú-*）を生じさせようとしたが、*indra-śatru-*の語のアクセント位置を誤ったため, インドラを天敵とする（*índra-śatru-*）, ヴリトラ（*vṛtra-*「障害」, 魔物の名）が生じてしまい, インドラを殺すことができなかったという話がブラーフマナ文献群に伝わっている」

MBh on vt. 6 (Paspaśā) [I.10.6–9]: *jñāne dharma iti cet tathādahrmaḥ prāpnoti | yo hi śabdāñ jānāty apaśabdān apy asau jānāti | yathaiva śabdajñāne dharma evam apaśabdajñāne 'py adharmaḥ | athavā bhūyān adharmaḥ prāpnoti | bhūyāṁso 'paśabdā alpīyāṁsaḥ śabdāḥ | ekaikasya śabdasya bahavo 'pabhraṁśāḥ | tad yathā | gaur ity asya śabdasya gāvī goṇī gotā gopotaliketyevamādayo 'pabhraṁśāḥ |*

【主張】［正しい言葉を］知っていれば功徳があると言うならば、同様に罪悪が結果する。何故なら、正しい諸語を知っている者、その者は正しくない諸語も知っているから[8]。正しい言葉を知っていると功徳があるのと全く同様に、正しくない言葉を知っていても罪悪がある[9]。あるいはむしろ、より多くの罪悪が結果する。正しくない諸語はより多く、正しい諸語はより少ない。一つ一つの正しい言葉に対して多くの逸脱語がある。例えば、*go*「牛」というこの正しい言葉に対して、*gāvī* (Jaina Mahārāṣṭrī)、*goṇī* (Ardhamāghadī/Jaina Mahārāṣṭrī)、*gotā* (Apabhraṁśa)、*gopotalikā* (Apabhraṁśa) というこの種のものが逸脱語である。

正しい言葉をただ知っているだけで功徳が積まれるとすると、以上のような不都合が生じる。

### 4.2 行為のみに基づく功徳

では、正しい言葉を使用すれば功徳が積まれると考えてはどうか。

vt. 8 (Paspaśā): *prayoge sarvalokasya* ||

［正しい言葉を］使用すると［功徳があると］すれば、全ての人に［功徳があることになる］。

MBh on vt. 8 (Paspaśā) [I.10.14]: *yadi prayoge dharmaḥ sarvo loko 'bhyudayena yujyate | kaś cedānīṃ bhavato matsaro yadi sarvo loko 'bhyudayena yujyeta | na khalu kaścin matsaraḥ prayatnānarthakyaṃ tu bhavati | phalavatā ca nāma prayatnena bhavitavyaṃ na ca prayatnaḥ phalād vyatirecyaḥ | nanu ca ye kr̥taprayatnās te sādhīyaḥ śabdān prayokṣyante ta eva sādhīyo 'bhyudayena yokṣyante | vyatireko api vai lakṣyate | dr̥śyante hi kr̥taprayatnāś cāpravīṇā akr̥taprayatnāś ca pravīṇāḥ | tatra phalavyatireko 'pi syāt | evaṃ tarhi nāpi jñāna eva dharmo nāpi prayoga eva | kiṃ tarhi |*

【主張】もし、［正しい言葉を］使用すると功徳があるとすれば、全ての人が繁栄と結びつくことになる。

【問】しかし今や、貴方にどんな不満があるのか。もし、全ての人が繁栄と結びつくとするならば。

【答】全くどんな不満もない。ただ、［人の文法学学習の］努力が無駄になる。そして実に、努力は果報をもたらすものであるはずであり、努力が果報から外れることはあり得ない。

【反論】しかし、［文法学学習の］努力をなした者たち、その者たちはより正しい仕方で諸語を使用するであろう[10]。まさにそのような者たちはより高い程度で繁栄と結びつくであろう。

---

[8]バルトリハリの「この者が［言葉の］学習の拠り所とする世間［の言語慣習］は、間違いを含んでいる。［世間の言語慣習は人に］正しい諸語と正しくない諸語［のどちら］を［も］学習させる」という言葉が想起される（§2 を見よ）。Cardona 1990 は次のように指摘する。Cardona 1990: 18, note 41: “Patañjali’s statement implies, of course, that any speaker of the pure Sanskritic language was also a speaker of a vernavuler, so that he necessarily knew vernacular “corruptions” of correct Sanskrit forms.”

[9]尾園 2014: §3.2.3 (58–60) は、パタンジャリのこの種の議論における *dharma* と *adharma* は実質的には *sukr̥tá-*「良い行い［の効力］」と *duṣkr̥tá-*「悪い行い」と同じ位置を占めていることを指摘している。

[10]「より正しい仕方で諸語を使用すること」（*sādhīyaḥ śabdān prayokṣyante*）が具体的にどのような状況を指すのか判然としない。

【答論】［それとは］違うことも観察されるのだ。なぜなら、努力したのに［正しい言語使用に］熟達せず、努力していないのに熟達している者たちがいるから。そのような場合、果報が［通常とは］異なることもあるはずである[11]。

【主張】このような場合、それなら、［正しい言葉を］知っているだけでも使用するだけでも功徳はない。

【問】それでどうなるのか。

正しい言葉を使用さえすればその実質を知らずとも功徳は積まれる、とする考えもまた、納得のいくものではない。

### 4.3 知識に裏付けられた行為に基づく功徳

第 9 vārttika に至ってカーティアーヤナは自身の立場を提言する。

vt. 9 (Paspaśā): *śāstrapūrvake prayoge 'bhyudayas tat tulyaṃ vedaśabdena* |

「文法学［の知識］を前提として言語使用がなされるとき、繁栄がある。それはヴェーダの言葉と同じである」

言語項目の形態や意味表示の内実を文法学に従って正しく理解した上で、言葉の使用が正しくなされたとき、繁栄が約束される。ここでカーティアーヤナは「功徳」という言葉を用いていないが、議論の文脈から（上記 vt. 6 と vt. 8 を見よ）、パタンジャリと同様、「功徳の積重 → 繁栄の獲得」という流れを彼も想定していると考えてよい。

#### 4.3.1 *tat tulyaṃ vedaśabdena* の解釈

上記 vārttika の後半部 *tat tulyaṃ vedaśabdena*「それはヴェーダの言葉と同じである」に対し、パタンジャリは二つの解釈を提示している。以下にそれぞれを検討する。

##### 4.3.1.1 第一解釈

MBh on vt. 9 (Paspaśā) [1.10.22–24]: *śāstrapūrvakaṃ yaḥ śabdān prayuṅkte so 'bhyudayena yujyate* | *tat tulyaṃ vedaśabdena* | *vedaśabdā apy evam abhivadanti* | *yo 'gniṣṭomena yajate ya u cainam evam veda* | *yo 'gnim nāciketam cinute ya u cainam evaṃ veda* |

文法学［の知識］を前提として正しい諸語を使用する者、そのような者は繁栄と結びつく。それはヴェーダの言葉［が説くこと］と同じである。ヴェーダの言葉もまた、次のように宣言している。「アグニシュトーマ祭によって祭る者、そしてこれをこのように知っている者は . . .」（*yo 'gniṣṭomena yajate ya u cainam evaṃ veda*）、「ナーチケータ火壇を築く者、そしてこれをこのように知っている者は . . .」（*yò 'gníṃ nāciketáṃ cinuté yá u cainam eváṃ véda*）と。

[11] 以上の点を理解するにあたっては Aklujkar 2004 の指摘が参考になる。Aklujkar 2004: 719.19–24: "Ultimately, what the grammarians claim is not that one gains *dharma* through grammatical usage simply because the usage is grammatical—because one succeeds in imitating someone whose usage happens to be deemed correct, faithful to the authorities or respectable. The usage must be backed or preceded by a knowledge of the *śāstra* behind it (note 13)."

最初の引用の典拠は不明であり（Rau 1985: 60.22）[12]、そのため文脈ははっきりしない。後半部は Taittirīya-Brāhmaṇa からの引用である（TB 3.11.8 [1382.19–20; 1382.25–1383.1]）。同文献に収められたナチケータス物語が説くところによれば、祭式の構成要素の内実を知って祭式行為を行うとき、祭主は成功をおさめる（「祭式と布施の効力の不滅」［*nā́syeṣṭāpūrté kṣīyete*］と「再死の克服」［*ápa punarmr̥tyúṃ jayati*］）。それと同様、言語項目が持つ形態と意味の内実を正しく理解した上で言葉を正しく使用する者には、繁栄が訪れる。当該 Bhāṣya はこのように解釈することができる。このようなヴェーダ思想との対比から、パタンジャリがここで言う「繁栄」はあの世での状態を意図するものである可能性を推定できる。

#### 4.3.1.2 第二解釈

> MBh on vt. 9 (Paspaśā) [1.10.24–26]: *apara āha tat tulyaṃ vedaśabdeneti | yathā vedaśabdā niyamapūrvam adhītāḥ phalavanto bhavanty evaṃ yaḥ śāstrapūrvakaṃ śabdān prayuṅkte so 'bhyudayena yujyata iti |*
>
> 他の者は *tat tulyaṃ vedaśabdena* について言っている。「ちょうど、ヴェーダの言葉がニヤマを前提として学習されたときに果報をもたらすものとなるように、同様に、文法学［の知識］を前提として正しい諸語を使用する者、そのような者は繁栄と結びつく」と。

「ニヤマを前提として」（*niyamapūrvam*）について、Joshi and Roodbergen 1986: 151–152, note 610 は三つの解釈可能性を挙げている。それらを、若干の補いを入れて示すと以下の通りである。

1. *niyama* という語は、ヴェーダ学生（*brahmacārín*）が遵守すべき諸々の生活制限、生活制限を伴う修行生活（*brahmacárya*）を意図する（バルトリハリ注は同解釈を支持）[13]。
2. *niyama* という語は、祭文における語順の制限、語順の決まりを意図する（Nirukta 1.15 [36.25–26]: *niyatavāco yuktayo niyatānupūrvyā bhavanti*）。
3. *niyama* という語は、祭文のアクセントと朗誦法に関する規則制限を意図する[14]。

Joshi and Roodbergen 1986 は特に理由を述べずに第三解釈をとる。しかしいずれの解釈をとるにせよ、*adhīta*「学ばれたとき」という語が示すように、師のもとでのヴェーダ学習が大前提としてあるはずである。ヴェーダ文化の維持は師資相承による学統の継承にかかっている。

師のもとで正しく学ばれたヴェーダの言葉の使用は、果報をもたらすもの（＝祭式の場で効力を発揮するもの）となる。それと同様に、言語の仕組みを示教する文法学の知識のもと言葉を使用すれば、果報として繁栄が訪れる[15]。

---

[12] 類似した内容を述べる一節を挙げておく。TS 7.1.1.3 (II.241.2): *yá evā́ṃ vidvā́n agniṣṭoména yájate |*（「このように知ってアグニシュトーマ祭によって祭る者は . . .」）

[13] この種のニヤマをジネーンドラブッディ（800 年頃）は「学識を得るために弟子入りすること」と説明する（Nyāsa on KV to A 1.4.29 [I.543.27–28]: *vidyāgrahaṇārthaṃ śiṣyapravr̥ttiḥ niyamaḥ*）。なお、*brahmacárya* という語の意味範囲も含め、ヴェーダ文献に描かれる「ヴェーダ学生」の様相については梶原 2016 が詳しい。

[14] この類いのニヤマに関しては Thieme 1931 による論考がある。

[15] Thieme 1931: 31.9–15 は、パタンジャリはカーティアーヤナが意図したことを分かっておらず彼の二解釈はぎこちないとする。そして、*tat tulyaṃ vedaśabdena* における *tat* を、*śāstrapūrvake* における śāstra を指示するものと解したいと述べ、同箇所に対し„Das Lehr buch ist gleich dem Vedawort (an Autorität)“という翻訳を提示している。しかし、少なくとも古典サンスクリットにおいて、複合語中の従属要素を指示代名詞の指示対象と理解することは、可能ではあるが普通ではない。

## 5 内実を理解した上での言語使用がもつ力

第 9 vārttika に表明される「その実質を知った上で言葉は使用されねばならない」という考えに関連して、パタンジャリが文法学学習の付随的 13 目的（*ānuṣaṅgika*）を論ずる中で引用する詩節を見ておきたい（MBh [Paspaśā] [I.2.15–16]）。

> *yad adhītam avijñātaṃ nigadenaiva śabdyate* |
>
> *anagnāv iva śuṣkaidho na taj jvalati karhicit* ||
>
> 学習されたとしても［意味が］識別されておらず、読み上げるだけで発声されるもの[16]、それは、火がないときの乾いた薪と同様、如何なるときも燃え盛らない[17]。

祭場で唱えられる祭文を対象とすると思しきこの詩節の趣旨は[18]、「意味を理解せずに発しても言葉は真価を発揮しない」という点にある。パタンジャリによれば、意味を理解せずに言葉を学習することがないよう、人は文法学を学ばれなければならない（MBh [Paspaśā] [I.2.17]: *anarthakaṃ mādhigīṣmahīty adhyeyaṃ vyākaraṇam*）。

内実を理解した上での言語使用がもつ力は、パタンジャリが引用する一節に端的に述べられている。

> MBh (Paspaśā) [III.58.13–17]: *tathā śabdasyāpi jñāne prayoge prayojanam uktam* | *kim* | *ekaḥ śabdaḥ samyagjñātaḥ śāstrānvitaḥ suprayuktaḥ svarge loke kāmadhug bhavatīti* | *yady ekaḥ śabdaḥ samyagjñātaḥ śāstrānvitaḥ suprayuktaḥ svarge loke kāmadhug bhavati kimartham dvitīyas tṛtīyaś ca prayujyate* | *na vai kāmānāṃ tṛptiḥ asti* |
>
> 同様に、正しい言葉についても、それを知っていることと使用することに対する目的が述べられている。
>
> 【問】どんな［目的］が。
>
> 【答】「一つの言葉でも、文法学に従って正しく知られ、正しく使用されるならば、天上界において如意牛となる」と［言われている］[19]。
>
> 【問】もし、一つの言葉が、文法学に従って正しく知られ、正しく使用されたとき天上界において如意牛となるならば、何のために第二、第三の［言葉］が使用されるのか。
>
> 【答】［人の］諸欲望は満足することがないのだ[20]。

カーティアーヤナとパタンジャリのダルマ論に照らせば、「正しい言葉が天上界において如意牛となる」（*svarge loke kāmadhug bhavati*）という表現は、文法学の知識に裏付けられた言語使用が蓄積する功徳はあの世で繁栄をもらたらすものとなる、という意に解せる。

---

[16] Pradīpa on MBh (Paspaśā) [I.13.12–13]: *nigadeneti pāṭhamātreṇa* |

[17] Pradīpa on MBh (Paspaśā) [I.13.13]: *na taj jvalatīti* | *niṣphalaṃ bhavati* |
ほぼ同じ詩節が Nirukta にも引用されている。Nirukta 1.18 (38.14–15): *yád gṛhītám avijñā́taṃ nigádenáiva śábdyate* | *ánagnāv íva śuṣkaidhó ná tú jvalati kárhi cit* ||

[18] 意味を他者に理解させるべく言葉が使用される日常世界において、話者が意味を理解せずに言葉をただ発しているという状況は、基本的にはあり得ない。

[19] 典拠不明である。聖典解釈学派クマーリラ（7 世紀）は、これをヴェーダ文献の文章として掲げ、正しい言語使用について考察している（針貝 2015: §I.2 [25–27]）。

[20] 井狩 1988: 299.11–300.9 によれば、行為を条件づけるものとして「欲望」（kāma）が明確に意識されはじめるのは初期ウパニシャッド文献においてである。

## 6 あの世における繁栄

パタンジャリが引く上記の格言は、「あの世における繁栄」に関心を寄せるものである。彼が文法学のある学習目的を説明する際に引用する以下の詩節もまた同様である（MBh [Paspaśā] [I.2.19–20]）。

*yas tu prayuṅkte kuśalo viśeṣe*

*śabdān yathāvad vyavahārakāle* |

*so ’nantam āpnoti jayaṃ paratra*

*vāgyogavid duṣyati cāpaśabdaiḥ* ||

しかし、［正しい言葉の］特質に通じ、言語活動時に諸語を適切に使用する者、言葉遣いを知るそのような者はあの世で無限の勝利を得る[21]。一方、［人は］誤った諸語を原因として汚れる[22]。

カーティアーヤナとパタンジャリの作中に、「繁栄」がこの世に関わるものとして明示的に述べられる箇所は見当たらない[23]。

## 7 パタンジャリの論説の背景—文法学伝統の崩壊と復興

最後に、文法学学習の 18 目的を論じ終えた後にパタンジャリが残した興味深い一節を吟味したい。

MBh (Paspaśā) [I.5.6–11]: *purākalpa etad āsīt* | *saṁskārottarakālam brāhmaṇā vyākaraṇam smādhīyate* | *tebhyas tatra sthānakaraṇānupradānajñebhyo vaidikāḥ śabdā upadiśyante* | *tad adyatve na tathā* | *vedam adhītya tvaritā vaktāro bhavanti* | *vedān no vaidikāḥ śabdāḥ siddhā lokāc ca laukikāḥ* | *anarthakaṃ vyākaraṇam iti* | *tebhya evaṃ vipratipannabuddhibhyo ’dhyetṛbhya ācārya idaṃ śāstram anvācaṣṭe* | *imāni prayojanāny adhyeyaṃ vyākaraṇam iti* |

前の時代では次のようであった。入門式の後に、婆羅門たちは文法学を学んだものだった。その場合、発声場所、内的発声努力、外的発声努力を知っている彼ら［婆羅門たち］にヴェーダの諸語が教示されることになる。

現在はそうなっていない。ヴェーダを学んだ後で［学生たちは］慌てて言う。「諸ヴェーダ聖典に基づいて、私たちのもとにヴェーダ語が確立されます。そして世間の言語慣習に基づいて日常語が。［ゆえに］文法学は無意味です」と。［文法学学習に対して］このように異論がある彼ら学生たちに、先生はこの文法学を説く。「これこれが［学習］目的である。［したがって］文法学が学ばれねばならない」と言って。

---

[21]「無限の勝利を」（*anantam . . . jayam*）という言い回しは、あの世における、蓄積された功徳とそれに基づく繁栄の不滅を示唆する。不滅の「祭式の布施の効力」の獲得については阪本 (後藤) 2015: §8.6 (90–91) を参照せよ。

[22]典拠不明である。

[23]なお、次の Āpastamba-Dharmasūtra の説述は、「正しい行い」（*dhamra*）はこの世の繁栄とあの世の繁栄の両者に関係するものであることを教示している。ĀpDhS 2.1.2.2–4: *sarvavarṇānāṃ svadharmānuṣṭhāne param aparimitaṃ sukham* || *tataḥ parivṛttau karmaphalaśeṣeṇa jātiṃ rūpaṃ varṇaṃ balaṃ medhāṃ prajñāṃ dravyāṇi dharmānuṣṭhānam iti pratipadyate* | *tac cakravad ubhayor lokayoḥ sukha eva vartate* | *yathauṣadhivanaspatīnāṃ bījasya kṣetrakarmaviśeṣe phalaparivṛddhir evam* |（井狩 2011: 17.8–12: 「どの階層に属するひとも、彼等自身のダルマを行えば最高の限りない幸がある。その後、生を終えたあと、（自分の生前の）行為の果報の残りによって（新たな生での）よき生まれ・姿形・肌色・体力・知力・知恵・財・ダルマを行う（能力）を得る。かく、車の両輪のように、彼は（この世とあの世の）ふたつの世界で幸せにありつづける。よき耕作があって、草木の種子がまったき結実に至るのと同様である」）

これは、文法学の学習目的を提示する理由を説明するものである。Cardona 1983: §5 (34–35) による考察を参照し、要点をまとめると次のようになる。パタンジャリによれば、今と昔とではヴェーダ学習の形態に違いがある。昔は、婆羅門は入門式（*upanayana*）の後すぐに文法学を学習していた。この時代の文法学の学習は、バルトリハリが説明するように、言葉の発声法の学習も含んでいた[24]。このように、言葉の発声法を含む文法学的知識を身につけた婆羅門にヴェーダは教示されたものであった。一方、今の時代では、文法学学習の前にヴェーダ学習が行われる。ヴェーダ語の音韻論（*prātiśākhya*）や発声法（*śikṣā*）に習熟した後に、文法学が教示されることになっている（*vyākaraṇaṃ nāmeyam uttarā vidyā*）[25]。しかし、今の学生たちはヴェーダ学習を終えると、結婚し生計を立てることに目がいき、文法学を不必要と断じてそれを学ぼうとしない。それゆえ、学生たちを諭すために、師は文法学学習の目的や果報を事細かに説明するのである。

以上の Bhāṣya の記述は、パタンジャリの時代において、パーニニ文法学の学習が学生たちに毛嫌いされていたことを暗示する。パタンジャリの奮闘虚しく、Vākyapadīya 第 2 巻末尾（VP 2.481–487）が記すところによれば、Mahābhāṣya の学習伝統は、チャンドラなる人物（チャンドラ文法の設立者チャンドラゴーミン［5 世紀中頃］か）がそれを回復させるまでの間、一度途絶えてしまったようである。一方で、バルトリハリによる文法学伝統の復興活動、グプタ朝（4 世紀初頭–6 世紀中頃）によるサンスクリット復古運動などに支えられて、以後、パタンジャリの Mahābhāṣya はパーニニ文法学を支柱とするサンスクリット文化において不動の地位を得るに至り、東南アジア諸地域にまで伝播する。

## 8 結語

中後期ヴェーダ文献（紀元前 800 年–400 年頃）に現れる *dhárma* という語の用例を精査した Olivelle 2004 によれば、仏教誕生以前の時代に、ダルマの概念は宗教的語彙の中で未だ中心的役割を担っていなかったようである。しかし、教説にダルマの概念を導入した仏教の興隆、アショーカ王（在位：紀元前 268 年–232 年頃）による仏教優遇とダルマに基づく政治、その理念を記した碑文法勅の発布などが引き金となり、ダルマの概念は婆羅門教側でも再定義され、重要な地位を占めるようになっていく。パタンジャリが活動したのは、ヴェーダ祭式文化の復興と仏教弾圧に精力的だったとされるシュンガ朝（紀元前 180 年–68 年頃）のプシュヤミトラ（在位：紀元前 180 年–144 年頃）の時代である。カーティアーヤナとパタンジャリのダルマ論は、このように婆羅門教が脅かされていた状況、そしてそれの復興の気運が高まっていた状況と無関係ではないであろう。このあたりの歴史的展開については Olivelle 2004; 2011、Deshpande 2006、井狩 2011 などがそれぞれの視点から思索をめぐらせている。

カーティアーヤナとパタンジャリは、ダルマの概念を言語運用の領域に取り入れ、ヴェーダ祭式の世界と日常の言語運用の世界を重ね合わせる。彼らは決してヴェーダ祭式の文化を否定しているわけではない。しかしその一方で、祭式行為に変わる、功徳を積んで繁栄を得る手段として、日常世界における正しい言語使用を提起している。このような繁栄獲得手段の力点の移行は、インド中期語の特徴をそなえた諸語の使用が観察された彼らの時代状況を反映するものである。両文法家にとって、それら諸語が正しくないもの（*asādhu*）であったことは言うまでもない。

---

[24] MBhD (IV.13.3–4): *purākalpe sthānakaraṇādīn vyākaraṇād eva pratipadyate | tato vaidikāḥ śabdā upadiśyante |*

[25] MBh on A 1.2.32 (I.208.19–20): *vyākaraṇaṃ nāmeyam uttarā vidyā | so 'sau chandaḥśāstreṣv abhivinīta upalabdhyāvagantum utsahate |* ナーゲーシャは *chandaḥśāstra* を *prātiśākhyaśikṣādi* と言い換える。Uddyota on MBh to A 1.2.32 (II.47.28–48.24): *chandaḥśāstreṣu prātiśākhyaśikṣādiṣu | abhivinītaḥ śikṣitaḥ | upalabdhyā vyutpattyā |*

## 略号及び参考文献

AB: *Aitareya-Brāhmaṇa*. See Aufrecht 1879.

ĀpDhS: *Āpastamba-Dharmasūtra*. See Bühler 1892.

BaudhDhS: *Baudhāyana-Dharmasūtra*. See Hultzsch 1884.

MBh: Patañjali's *Mahābhāṣya*. See Abhyankar 1962–1972.

MBhD: Bhartṛhari's *Mahābhāṣyadīpikā*. See Bronkhorst 1987.

Nirukta: Yāska's *Nirukta*. See Roth 1852.

Nyāsa: Jinendrabuddhi's *Nyāsa*. See Miśra 1985.

Pradīpa: Kaiyaṭa's *Pradīpa*. See Vedavrata 1962–1963.

PŚ: *Pāṇinīyaśikṣā*. See Caturveda and Bhāskara 1958–1961.

TB: *Taittirīya-Brāhmaṇa*. Ānandāśramasaṁskṛtagranthāvaliḥ 37: *Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyabrāhmaṇam. Śrīmatsāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam*. 3 vols. Third edition. Poona: Ānandāśramamudrāṇālaya.

TS: *Taittirīya-Saṁhitā*. See Weber 1871–1872.

Uddyota: Nāgeśa's *Uddyota*. See Vedavrata 1962–1963.

VP: Bhartṛhari's *Vākyapadīya*. See Rau 1977.

vt.: Kātyāyana's vārttika. See Abhyankar 1962–1972.


Abhyankar, Kashinath Vasudev

1962–1972 *The Vyākaraṇa-mahābhāṣya of Patañjali: Edited by F. Kielhorn*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series 18–22, 28–33. 3 vols. Bombay: Government Central Press, 1880–1885. Third edition, revised and furnished with additional readings, references and select critical notes by K. V. Abhyankar. 3 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962–1972.

Akamatsu, Akihiko (赤松明彦)

1994 「バルトリハリにおける abhyudaya と niḥśreyasa—文法学は何のために学ばれるのか—」『哲学年報』53: 1–24.

Aklujkar, Ashok

2004 "Can the Grammarian's *dharma* Be a *dharma* for All?" *Journal of Indian Philosophy* 32: 687–732.

Aufrecht, Theodor

1879 *Das Aitareya Brāhmaṇa: Mit Auszügen aus dem Commentare von Sāyaṇācārya und anderen Beilagen herausgegeben*. Bonn: Adolph Marcus.

Bronkhorst, Johannes

1987 *Mahābhāṣyadīpikā of Bhartṛhari*. Fascicule IV: Āhnika I. Bhandarkar Oriental Research Institute Post-Graduate and Research Department Series 28. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Bühler, George

1892 *Āpastambīyadharmasūtram: Aphorisms on the Sacred Law of the Hindus, by Apastamba*. Edited, with extracts from the commentary. Second edition, revised. Part I. Bombay: Government Cantral Book Depôt.

Cardona, George

1983 *Linguistic Analysis and Some Indian Traditions* (Pandit Schripad Shastri Depdhar Memorial Lectures [First Series]). Post-graduate and Research Department Series No. 20. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.

1990 "On Attitudes Towards Language in Ancient India." *Sino-Platonic Papers* 15: 1–19.

1997 *Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction.* Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.

Caturveda, Giridhara Śarmā, and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara

1958–1961 *Śrīmadbhaṭṭojidīkṣitaviracitā vaiyākaraṇasiddhāntakaumudī śrīmadvāsudevadīkṣitapraṇītayā bālamanoramākhyavyākhyayā śrīmajjñānendrasarasvatīviracitayā tattvabodhinyākhyavyākhyayā ca sanāthitā.* 4 vols. Varanasi: Motilal Banarsidass.

Deshpande, Madhav M.
2006 “Changing Perspectives in the Sanskrit Grammatical Tradition and the Changing Political Configurations in Ancient India.” In *Between the Empires: Society in India 300 BCE to 400 CE*, ed. Patrick Olivelle, 215–223. New York: Oxford University Press.

Enomoto, Fumio (榎本文雄)
1996 「罪業の消滅と prāyaścitta」『待兼山論叢』30 (哲学篇): 1–12.

Furui, Ryōsuke (古井龍介)
2007 「古代の歴史と社会」『新アジア仏教史 01 インド I　仏教出現の背景』所収（pp. 68–113）東京：佼成出版社

Gotō, Toshifumi (後藤敏文)
2005 「ダルマ（法）」『宗教のキーワード集—この一冊で世界がわかる』所収（p. 694）東京：学灯社
2009 「「業」と「輪廻」—ヴェーダから仏教へ—」『印度哲学仏教学』 24: 16–41.

Harikai, Kunio (針貝邦生)
2015 「マハーバーシュヤ第一日課（Paspaśā-Āhnika）とタントラヴァールッティカ」『比較論理学研究』12: 21–37.

Hultzsch, E.
1884 *The Baudhâyanadharmaśâstra.* Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes. VIII. Band. No. 4. Leipzig: Brockhaus.

Ikari, Yasuke (井狩弥介)
1988 「輪廻と業」『岩波講座 東洋思想 第 6 巻 インド思想 2』所収（pp. 275–306）東京：岩波書店
2011 「インド法典と「ダルマ（dharma）概念の展開」—ヴェーダ期、ダルマスートラを中心に—」龍谷大学南アジア研究センター伝統思想シリーズ 1

Joshi, S. D. and J. A. F. Roodbergen
1986 *Patañjali's Vyākaraṇa-Mahābhāṣya: Paspaśāhnika, Introduction, Text, Translation and Notes*. Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit Class C; No. 15. Pune: University of Poona.

Kajihara, Mieko (梶原三恵子)
2016 「ウパニシャッドと初期仏典の一接点—入門・受戒の儀礼とブラフマチャリヤ—」『人文學報』109: 33–102.

Kataoka, Kei (片岡啓)
1999 「永遠のダルマと顕在化—祭事教学ミーマーンサーにおける「ダルマ開顕説」再建に向けて—」『インド哲学仏教学研究』6: 3–16.
2000 “Reconstructing the *Dharma-abhivyakti-vāda* in the Mīmāṃsā Tradition.” In *Japanese Studies on South Asia No. 3. The Way to Liberation–Indological Studies in Japan–. Vol. I.*, ed. Sengaku Mayeda,167–181. New Delhi: Manorhar.
2010 「宗教の起源と展開」『新アジア仏教史 01 インド I　仏教出現の背景』所収（pp. 119–172）東京：佼成出版社
2011 『ミーマーンサー研究序説』福岡：九州大学出版会

Katsura, Shōryū (桂紹隆)
2015 「普遍的法則としてのダルマ—仏教的パースペクティブ—」『幸福を求めて：ダルマと現代インド仏教徒：2014 年度』所収（pp. 47–53）京都：龍谷大学アジア仏教文化研究センター

Kawamura, Yūto (川村悠人)
2017 『バッティの美文詩研究—サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学—』京都：法蔵館

Miśra, Nārāyaṇa
1985 *Kāśikāvṛtti of Jayāditya-Vāmana (Along with Commentaries Vivaraṇapañcikā–Nyāsa of Jinendrabuddhi and Padamañjarī of Haradatta Miśra).* Ratnabharati Series 5–10. 6 vols. Varanasi: Ratna Publications.

Olivelle, Patrick
2004 “The Semantic History of Dharma: The Middle and Late Vedic Period.” *Journal of Indian Philosophy* 32: 491–511.
2011 *Language, Texts, and Society: Explorations in Ancient Indian Culture and Religion*. London and New York: Anthem Press.

Ozono, Junichi (尾園絢一)
2014 「正しい言葉（*śábda-*）—ヴェーダとパーニニ文法学の観点から—」『論集』41: 77–103.

Rau, Wilhelm
1977 *Bhartṛharis Vākyapadīya: Die Mūlakārikās nach den Handschriften herausgegeben und mit einem Pāda-Index versehen*. Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XLII, 4. Wiesbaden: Steiner.
1985 *Die vedischen Zitate im Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften und der Literatur. Jahrgang 1985. Nr. 4. Stuttgart: Steiner.

Roth, Rudolph
1852 *Jâska's Nirukta sammt den Nighaṇṭavas*. Göttingen: Verlag der Dieterichschen Buchhandlung.

Sakamoto-Gotō, Junko (阪本 [後藤] 純子)
1996 「iṣṭā-pūrtá-「祭式と布施の効力」と来世」『今西順吉教授還暦記念論文集：インド思想と仏教文化』所収（pp. 863–882）東京：春秋社
2000 "Das Jenseits und *iṣṭāpūrtá-* "die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten" in der Vedischen Religion." In *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik*, ed. Bernhard Forssman und Robert Plath, 475–490. Wiesbaden: Reichert Verlag.
2015 「生命エネルギー循環の思想—「輪廻と業」理論の起源と形成—」龍谷大学南アジア研究センター伝統思想シリーズ 24

Thieme, Paul
1931 "Grammatik und Sprache: ein Problem der altindischen Sprachwissenschaft." *Zeitschrift für Indologie und Iranistik* 8: 23–32.

Vedavrata
1962–1963 *Śrībhagavat-patañjali-viracitam Vyākaraṇa-Mahābhāṣyam (Śrī-kaiyaṭakṛta-pradīpena nāgojī-bhaṭṭa-kṛtena-bhāṣyapradīpoddyotena ca vibhūṣitam)*. 5 vols. Gurukul Jhajjar (Rohtak): Hairyāṇā Sāhitya Saṃsthāna.

Watase, Nobuyuki (渡瀬信之)
2012 「ブラフマニズム社会の再編—理念社会の形成と多様社会への対応・共生から結合のための装置—」龍谷大学南アジア研究センター伝統思想シリーズ 8

Weber, Albrecht
1871–1872 *Die Taittirîya-Saṁhitâ*. 2 Bde. Indische Studien 11–12. Leipzig: Brockhaus.

Yamazaki, Genichi (山崎元一)
1982 『アショーカ王とその時代—インド古代史の展開とアショーカ王—』東京：春秋社

Yoshimizu, Kiyotaka (吉水清孝)
1998 「クマーリラにおける祭式構造論の転換」『南アジア研究』10: 56–73.
2000 "Change of View on *apūrva* from *Śabarasvāmin* to *Kumārira*." In *Japanese Studies on South Asia No. 3. The Way to Liberation–Indological Studies in Japan–. Vol. I.*, ed. Sengaku Mayeda, 149–165. New Delhi: Manorhar.
2012 「クマーリラにおける個体中心の存在論—アリストテレスとの比較による試論—」『インド論理学研究』5: 1–46.

（かわむら　ゆうと、日本学術振興会特別研究員［インド哲学］）

# Early Grammarians on dharma: Knowledge and Practice in the Ordinary and Vedic Worlds

Yūto Kawamura

Kātyāyana's Vārttika begins with the following statement:

> vt. 1 (Paspaśā): *siddhe śabdārthasambandhe lokato 'rthaprayukte śabdaprayoge śāstreṇa dharmaniyamo yathā laukikavaidikeṣu* ||

Let me cite here Cardona's lucid explanation of this statement and Patañjali's Bhāṣya thereon:

> It is given from every day communication in the world that there is an established relation between words and meanings; it is also given that the use of a word is prompted by a meaning in that one uses words in order to convey meanings. This being so, a restriction intended for merit (*dharmaniyamaḥ*) is established by the grammar. Kātyāyana says such a restriction has parallels in every day life and in practices based on Vedic lore. Two examples that Patañjali gives will suffice to illustrate. Smṛti texts provide that certain animals may be eaten and that others may not be eaten. It is forbidden, for example, to eat a domestic fowl or pig. Now, one consumes something in order to do away with hunger, and this can be done by eating anything, including dog meat. A restriction is set down, then: such and such may be eaten, such and such may not be eaten. In ritual practice, a sacrificial pole is used; an animal being offered is tied to this pole. The animal may be tied to any piece of wood, which one may set erect or not. A restriction is established, whereby the sacrificial pole is not only to be erected but is to be made of Bilva or Khadira wood . . . . Patañjali goes on to show how the same situation obtains with respect to language use. Both a correct speech form (*śabdena*) and an incorrect speech form (*apaśabdena*) serve to produce the same understanding of a meaning (*samānāyām arthagatau*). A restriction intended for merit is made in the grammar: The meaning in question should be conveyed only by a correct speech form, not by an incorrect one. And usage in conformity with this restriction produces felicity, prosperity. (Cardona 1997: paragraph 830)

In vārttikā 9 of the Paspaśā: *śāstrapūrvake prayoge 'bhyudayas tat tulyaṃ vedaśabdena*, Kātyāyana sets forth that the use of correct speech forms, preceded by a knowledge of grammar (*śāstrapūrvake prayoge*), results in prosperity (*abhyudaya*). In his Bhāṣya on the vārttika Patañjali elaborates on this theme, comparing śāstrapūrvaka-prayoga to Vedic norms (MBh on vt. 9 [Paspaśā] [1.10.22–26]).

In Kātyāyana's and Patañjali's discussions the following causal sequence is assumed:

> śāstrapūrvaka-prayoga → dharma is produced → abhyudaya (in heaven)

They propose śāstrapūrvaka-prayoga in the everyday world as a means of gaining merit and, through this, as a means of achieving prosperity; they intend this means to serve as an alternative to ritual activities (*tat tulyaṃ vedaśabdena*). This idea is a close reflection of the linguistic situation of their time, in which Middle Indic vernacular forms are observed to be used. It goes without saying that in their views such forms are to be regarded as incorrect (*asādhu*).

---

*The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 14 (2017): 103–121.
email: ykawamura0619@gmail.com

## 書籍の訂正表と索引の追加

2017 年 1 月に出版した書籍（川村 2017）中に修正すべき点が少なからずあることが校了後に判明いたしました。現段階で筆者が気づいたものについて以下に訂正表を付します。その他、お気づきの点がございましたら是非とも川村（ykawamura0619@gmail.com）までお知らせください。

加えて、規則例証に関わる重要語句の索引を付します。本来は書籍中に組み込まれるべきものですが、筆者の愚鈍と怠慢によりこのような形をとることとなりました。先生方のご寛恕を乞う次第です。出版社側に非は全くないことをここに明記いたします。

| 頁・行 | 訂正前 | 訂正後 |
|---|---|---|
| xiii.26–27; xiii.30–31; xvii.33; xxiv.9 | Pāndurang Jāwajī | NSP |
| xvii.15 | Satyabhamabai Pandurang | NSP |
| xxi.32 | Olivelle, Suman | Olivelle, Patrick |
| xxiv.21 | Pāṇḍurang Jāwajī | NSP |
| xv.25 | Tukārām Jāvajī | NSP |
| 67.9–11 | Peri 1980–81: 411.2 は, 接辞（pratyaya）である ūṄ を加音（āgama）と勘違いしている。ūṄ が接辞であるか加音であるかは, subhru という語形の派生に大きく関わる | Peri 1980–81: 411.2 は, 代置要素（ādeśa）である uvAṄ を加音（āgama）と勘違いしている |
| 67.13–14 | 「術語 nadīの適用を禁止する A 1.4.4 は一度だけしか教示されないから」 | 「A 1.4.4 による術語 nadīは一度だけしか教示されないから」 |
| 112.18; 112.23; 113.7 | (1) . . . (2) | (a) . . . (b) |
| 144.23 | 私には頼みたいことがある。文法学を私に学ばせてほしい | 私には「文法学を学べたら」という願いがある |
| 165.22 | 動詞語基 rādh（「吉凶を吟味する」）と īkṣ（「吉凶を吟味する」） | 動詞語基 rādh（「成功する、吉凶を吟味する」）と īkṣ（「観察する、吉凶を吟味する」） |
| 167.12; 168.13 | (17a) | (17) |
| 167.13; 169.5 | (18a) | (18) |
| 168.2–3 | 動詞語基śru は約束行為（abhyupagama=pratijñāna）を意味する。そしてその約束行為は, | 動詞語基śru は承諾行為（abhyupagama）、すなわち約束行為（pratijñāna）を意味する。そしてその承諾行為は, |
| 168.22 | 「聖典を学ぶ者」 | 「学識豊かな者」 |
| 168.24 | 聖典を学ぶ教示者達 | 学識豊かな教示者達 |
| 169.2; 169.7; 170.5–8; 205.31 | gr̥̄ | gr̥ |
| 169.22; 170.3 | (18b) | (18) |
| 176.18; 177.16 | (27a) | (27) |
| 178.9; 178.25 | 27a | 27 |

| 頁・行 | 訂正前 | 訂正後 |
|---|---|---|
| 179.8 | BhK 8.82–83, | BhK 8.82–83; |
| 186.14 | 同じく (30a)(32-2) において | (30b)(32-1) と (30a)(32-2) において |
| 186.16–17 | 定動詞形 upahāraya | 定動詞形 kāraya と upahāraya |
| 206.1 | と認める | と承諾する |
| 206.7 | ［聖典を］学ぶ者達に, すなわち聖典に傾倒する者達に | 学ぶ者達に, すなわち学識豊かな者達に |
| 206.9 | すなわち承認する | すなわち承諾する |
| 206.14 | 彼を他の者が鼓舞する | 彼を他の者〈アドヴァリウ祭官〉が鼓舞する |
| 206.15 | 朗唱者を鼓舞すること | 朗唱者を鼓舞する［詞］ |
| 206.31–32 | お前は朗唱せよ | お前は教示せよ |
| 216.21 | [I.626.7] | [I.626.7–8] |
| 217.10–11 | Nyāsa on KV to A 1.4.96 [I.626.29–30]; PM on KV to A 1.4.96 [I.626.14] | PM on KV to A 1.4.96 [I.626.14–15] |
| 217.15 | [I.626.30–627.21] | [I.626.30–627.22] |
| 251.19 | (2c) | (2) |
| 252.13; 254.13 | (5b) | (5) |
| 317.14 | dhā（「支え持つ」） | dhā（「置き定める、支え持つ」） |
| 320.26 | ati-i（「越える」） | ati-i（「越え行く」） |
| 362.25 | ruj（「壊す」） | ruj（「こじ開ける、壊す」） |
| 408.11 | Students | students |
| 412.9; 412.12 | (a)–(e) | (a)–(f) |
| 412.12 | (f) | (f’) |
| 412.14 | (a’)–(e’) | (a’)–(f’) |
| 413.17 | *-api/āpi s-* | *-pi s-* |

akārṣuḥ (BhK 9.1)
akrudhyat (BhK 8.75)
akṣāriṣuḥ (BhK 9.8)
agrahīt (BhK 9.9)
agresara (BhK 5.97)
agrya (BhK 1.22)
acyutat (BhK 6.28)
ati (BhK 8.90)
atrasiṣuḥ/atrāsiṣuḥ (BhK 9.11)
adevīt (BhK 8.122)
adhi (BhK 8.90; 8.93)
adhipati (BhK 8.114)
adhivātsīḥ (BhK 8.79)
adhiśeṣva (BhK 8.79)
adhiṣṭhāḥ (BhK 8.79)
adhyāvasat (BhK 8.80)
adhyeti (BhK 8.119)
anu (BhK 8.85; 8.86; 8.88)
anugr̥ṇanti (BhK 8.77)
anujānīhi (BhK 20.2)
anumantāsvahe (BhK 22.23)
antakara (BhK 5.99)
antarā (BhK 8.94)
anyavat (BhK 8.105)
apa (BhK 8.87)
apaṇiṣṭa (BhK 8.121)
api (BhK 8.91; 8.92)
apr̥cchat (BhK 6.8)
abhaiṣīt (BhK 15.1)
abhi (BhK 8.89)
abhitaḥ (BhK 1.12)
abhinyavikṣathāḥ (BhK 8.80)
abhyaguḥ (BhK 15.2)
arāsiṣuḥ (BhK 9.11)
aruṣkara (BhK 5.100)
alaṅkariṣṇu (BhK 7.3)
alam (BhK 8.98)
avacinvāna (BhK 6.10)
avadhiṣuḥ (BhK 15.2)
avamaṁsthāḥ (BhK 8.81)
avamiṣuḥ (BhK 9.10)
avaśyāya (BhK 6.80)
avasāya (BhK 6.81)
avahāra (BhK 6.81)
avādīt (BhK 9.9)
avārudhat (BhK 6.9)
avrājīt (BhK 9.8)
aśapta (BhK 8.74)
asūyata (BhK 8.75)
ahaṁyu (BhK 1.20)
ahvālīt (BhK 9.8)
ā (BhK 8.88)
ākhyāyaka (BhK 8.128)
ājighra (BhK 6.77)
ādāyacara (BhK 5.97)
āyukta (BhK 8.115)
āssva (BhK 8.79)
aikṣiṣata (BhK 15.2)
aikṣiṣṭa (BhK 15.1)
itara (BhK 8.106)
īśvara (BhK 8.115)
ujjāsaya (BhK 8.120)
utkira (BhK 6.76)
uttarāhi (BhK 8.107)
utsuka (BhK 8.117)
udejaya (BhK 1.15; 6.78)
uddhama (BhK 6.77)
uddhaya (BhK 6.77)
udbhāsin (BhK 6.74)
upa (BhK 8.86; 8.87)
upaśāyikā (BhK 8.123)
upādātr̥ (BhK 8.128)
upāyaṁsata (BhK 8.33)
upāskr̥ṣṭām (BhK 8.119)
r̥ṇāt (BhK 8.103)
r̥te (BhK 8.105)
kadvada (BhK 6.75)
kapidvipa (BhK 6.88)
karmakara (BhK 5.99)
kalahakāra (BhK 5.100)
kāraka (BhK 6.71)
kuśala (BhK 8.115)
kr̥cchra (BhK 8.110)
gāthaka (BhK 6.84)
gāmuka (BhK 8.126)
guhāśaya (BhK 6.93)
gr̥ha (BhK 6.83)
gr̥hāṇa (BhK 20.2)
graha (BhK 6.83)
grāha (BhK 6.83)
cariṣṇu (BhK 7.3)
cikīrṣu (BhK 8.126)
cittasaṅkhya (BhK 6.89)
cetaya (BhK 6.79)
jiṣṇu (BhK 1.25)
jīvaka (BhK 6.86)

jīvema (BhK 19.5)
jña (BhK 6.76)
jvala (BhK 6.79)
tr̥ṇāya matvā (BhK 8.99)
dakṣiṇataḥ (BhK 8.107)
dakṣiṇena (BhK 8.108)
dattrima (BhK 1.13)
dada (BhK 6.79)
dayamāna (BhK 8.119)
dayākara (BhK 5.98)
dāva (BhK 6.82)
divākara (BhK 5.99)
divātana (BhK 6.13)
dīpra (BhK 1.24; 7.23)
dīvyat (BhK 8.78)
duṣkara (BhK 8.128)
duhat (BhK 6.9)
dogdhi (BhK 8.82)
draṣṭr̥ (BhK 6.71)
dhāya (BhK 6.79)
dhāraya (BhK 6.78)
dhārayat (BhK 8.74)
dhr̥ṣṇu (BhK 1.25)
naktantana (BhK 6.13)
nandana (BhK 6.71; 6.72)
namas (BhK 8.98)
namra (BhK 1.24; 7.23)
nartaka (BhK 6.84)
nāthasva (BhK 8.120)
nāya (BhK 6.82)
nirākariṣṇu (BhK 1.19; 7.3)
niśācara (BhK 6.93)
nihnuvāna (BhK 8.74)
pathiprajña (BhK 6.89)
parājayamāna (BhK 8.71)
pari (BhK 8.88)
paritaḥ (BhK 1.12)
paribhāvin (BhK 6.74)
pāraya (BhK 6.78)
pūrvasara (BhK 5.97)
pr̥thak (BhK 8.109)
pragla (BhK 6.76)
praṇihaniṣyati (BhK 8.121)
prati (BhK 8.88; 8.89)
pratiśr̥ṇvanti (BhK 8.77)
prayātāsi (BhK 22.1)
prasita (BhK 8.117)
prāñc (BhK 8.106)
prātiṣṭhipat (BhK 15.1)
prādevīt (BhK 8.122; 9.9)
priya (BhK 6.76)
praurṇaviṣuḥ (BhK 9.10)
praurṇāviṣuḥ (BhK 9.10)
brūte (BhK 6.8)
bhikṣamāṇa (BhK 6.9)
bhikṣārha (BhK 6.91)
bhojayiṣyāmi (BhK 8.83)
maghā (BhK 8.117)
manohara (BhK 6.91)
manthin (BhK 6.74)
yaśaskara (BhK 5.98)
yācamāna (BhK 6.8)
yogya (BhK 1.22)
ramaṇa (BhK 6.72)
rokṣyanti (BhK 8.120)
rocana (BhK 6.73)
rocamāna (BhK 8.73)
rociṣṇu (BhK 1.25; 7.2)
roditi sma (BhK 18.1)
lavaka (BhK 6.85)
limpa (BhK 6.79)
leha (BhK 6.82)
vanecara (BhK 5.97)
vartiṣṇu (BhK 7.3)
varmahara (BhK 6.91)
vākyakara (BhK 5.98)
vāśana (BhK 6.73)
vitr̥da (BhK 6.76)
vinā (BhK 8.109)
vinda (BhK 1.15)
vipaktrima (BhK 1.10)
vilāpayase (BhK 8.83)
viśvāsaprada (BhK 6.89)
viṣamastha (BhK 6.88)
vihitrima (BhK 1.13)
vairakāra (BhK 5.100)
vyaśnute sma (BhK 18.1)
vyāhārṣuḥ (BhK 15.2)
vyomamāya (BhK 6.87)
śaṅkara (BhK 6.92)
śatakr̥tvas (BhK 8.122)
śatrulāva (BhK 6.87)
śabdakāra (BhK 5.100)
śarmada (BhK 6.88)
śāyaya (BhK 8.83)
śāsti (BhK 6.10)

śiva (BhK 8.130)
śubhaṁyu (BhK 1.20)
śokāpanuda (BhK 6.88)
ślāghamāna (BhK 8.73)
saṅkrudhyasi (BhK 8.76)
sañjānāna (BhK 8.102)
sadr̥śa (BhK 8.129)
sammata (BhK 8.124)
saṁsrāva (BhK 6.80)
sahiṣṇu (BhK 1.20; 7.4)
sāmaga (BhK 6.90)
su (BhK 8.90)
sukhāhara (BhK 6.91)
surāpa (BhK 6.90)
stoka (BhK 8.110)
sthamberama (BhK 6.92)
spr̥hayamāṇa (BhK 8.75)
svasti (BhK 8.98)
svāmin (BhK 8.114)
hanyantām (BhK 20.2)
hāyana (BhK 6.85)
hita (BhK 8.130)
hiṁsra (BhK 1.24)
hetoḥ (BhK 8.103)
hetoḥ kasya (BhK 8.104)